



TITLE:

空間語彙と時間語彙への意味分化 の考察: 日本語の「サキ」の分析

AUTHOR(S):

寺崎, 知之

CITATION:

寺崎, 知之. 空間語彙と時間語彙への意味分化の考察: 日本語の「サキ」の分析. 言語科学論集 2010, 16: 1-23

ISSUE DATE:

2010-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/141361>

RIGHT:

空間語彙と時間語彙への意味分化の考察

—日本語の「サキ」の分析—

てらさき ともゆき
寺崎 知之

京都大学大学院／日本学術振興会

strosuss@marine.odn.ne.jp

1. はじめに

本論では、一般に元々空間的意味を表していた語が時間的意味に派生したと言われる事例を考察対象とする。具体的には、日本語の「サキ（先）」を例にとり、この「サキ」がどのように時間語彙、および空間語彙として用いられ、それらがどのように関係しあうかを検討する。

「サキ」と類似した現象を示す語には、同じように時空間に渡って用いられる「マエ（前）」や「ウシロ・アト・ノチ（後）」などがあるが、今回は中心となる題材として、空間的に独自の意味の広がりを持つと考えられる「サキ」を取り扱うことにした。「サキ」の振る舞いと密接に関わり、対比の検討に値する場合にのみ、「マエ」などの例も参照することとする。具体的な構成としては、2節では「サキ」の空間における用法についての先行研究を概観し、さらに3節で時間における用法についても確認する。その後4節でそれら先行研究の問題点を指摘し、改めて分析を行う。

2. 「空間を表すサキ」の分析

多くの先行研究において、「サキ」の意味を検討するに際してその用法を大きく2つに分けている。それが「空間を表すサキ」と「時間を表すサキ」である。こうした分類の動機付けとしては、空間メタファーを介した時間表現がある。この節では、この分類に則り、先行研究の中で空間における「サキ」について言及した部分について記述する。

2.1. 現象素を用いた「空間を表すサキ」

サキという語には、様々で、時には互いに矛盾するかのような多義が含まれるが、国広（1997）ではサキという言葉の現象素を1つ定め、これと視点の位置を組み合わせることで、統一的な説明を試みている。「現象素」とは、「語の用法と結びついた外界の現象・出来事・物・動作など、感覚で捉えることの出来るもので、言語外に人間の認知の対象として認められるものである」との説明が付されており、ここで提示された現象素とは以下のようなものである。

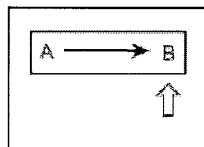


図1 サキの現象素（国広 1997: 250）

図1の中で、白抜き矢印 (↖) で示したのがサキの部分である。そして黒い矢印 (→) は事物の「方向性」を示すとする。この「方向性」には2通りの場合があり、1つは、物が形の上で方向性を示す場合（銃のサキ、ペン先、など）。そしてもう1つは、形の上では両端に変わりがなくても、全体が一方向に進んでいる場合（サキを切って走る、行列のサキ、など）である。つまり、この現象素の示す「サキ」の必要条件は、「形」もしくは「動き」である。

さらに、この図1の派生形として以下のようなものも提示されている。

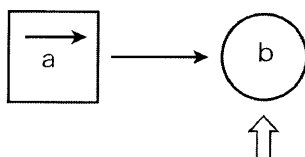


図2 サキの現象素の派生（国広 1997: 251）

図2は、移動体の全体から移動方向に投射された外部に、指示の矢印 (↖) が向けられる場合もあることを示すものである。この場合、指し示された図中bは単なる空間、位置の場合もあるし、具象化を受けて物体や人間となる場合もある。

- (1) a. このサキ行き止まり。
- b. 旅行サキ、主張サキ
- c. 霧で10メートルサキも見えない。

こうした例では、図中aで示されたものは基本的に移動体であることが前提となるが、(1) の場合は、必ずしもaが移動体ではない。しかし、移動しない場合でも視線がaからbに伸びていると考えられているので、これが移動となる。詳しくは、国広の説明では「移動体から見て前方の遠い所という語義になる」とされている。

2.2. 認知言語学の枠組みによる「空間を表すサキ」

碓井 (2001) では、国広の現象素による分析の有効性を全面的に認めつつ、さらに認知言語学の道具立てである参照点構造を用いて、より詳細な「サキ」の語義記述を行っている。

まず、碓井は「サキ」を決定付ける要因として、以下の4つを取り上げている。

- (2) 「サキ」を決定付ける要因
 - ① 長く細いもののスキーマ
 - ② メンタルパスの方向性
 - ③ モノの形状（先端が尖っている等）
 - ④ モノの移動性

（碓井 2001: 54）

以下では、これら4つの要因について、節を分けて見ていくこととする。

2.2.1. 長く細いもののスキーマ

1つ目の要因は「長くて細いもののスキーマ」である。私達が「一のサキ」という語を用いた場合、「長く細いものの先端」というイメージが自ずと想起される。それはこれまでの経験から、私達があるモノの「サキ」という場合、その対象は長く、細いという形状を持ち合わせていることが大多数であることによると考えられるためである。この喚起されるイメージを「サキ」の重要な要因の1つとして認める。このスキーマの重要性は、以下のような例から確認できる。

- (3) a. *じゃがいものサキ
- b. ?なすびのサキ
- c. きゅうりのサキ

(碓井 2001: 55)

(3) の例は、「じゃがいも」のような丸いものは「サキ」と共起することが出来ないことを示している。一方、「きゅうり」のように細く長いもの場合は「サキ」と共起することが可能である。さらに、こうした「細く長いもの」の「サキ」にもいくつかの分類が可能であるとし、これを細かく4つの場合に分類している。

- (4) 長く細いもののスキーマを持つ「サキ」の4分類
 - (イ) 長く細いものであるが、両先端に特徴が見られないため両端が「サキ」となる場合
 - (ロ) 長く細いものであり、先端に特徴があるため特徴がある先端が「サキ」となる場合
 - (ハ) 長く細いものであり、その形状から「サキ」が決まっており、「サキ」が表すものが空間の場合
 - (ニ) 長く細いものであり、両先端に特徴は見られないが、一方向が「サキ」となる場合
- (碓井 2001: 56)

具体的には、(イ) には「竿のサキ」や「紐のサキ」のような事例が含まれ、以下 (ロ) には「槍のサキ」や「ペンのサキ」などの尖ったもの、(ハ) には「岬のサキ」のような空間を示すもの、(ニ) には「行列のサキ」が上げられている。特に (ロ) や (ハ) の場合には、(2) であげた要因の③「モノの形状」に依るところが大きい。

いくらか特殊な事例が (ニ) の「行列のサキ」である。これについて、国広 (1997) では「形の上では両端がなくても、全体が一方向に進んでいる場合である。形は縦長で、進む方向は縦方向でなければならない」(国広 1997: 251) と述べられているが、これに対して碓井 (2001) では「『行列のサキ』は全体が一方向に進んでいない場合でも使用可能である。従って『行列のサキ』の場合、国広が指摘するように全体が一方向に進んでいる必要はない」(碓井 2001: 58) と述べ、その根拠として以下の例文をあげる。

- (5) 開店前の店の前には 300m の行列が出来た。その行列のサキはここからでは見えない。
- (碓井 2001: 58)

この場合、行列自体に移動する要素が無いにも関わらず「サキ」が使用可能であり、これを

要因②であげた「メンタルパスの方向性」と密接に関わっていると位置づけている。

2.2.2. メンタルパスの方向性

「細く長いもののスキーマ」と並んで重要な「サキ」の要因として取りあげられているのが「メンタルパスの方向性」である。「細く長いもののスキーマ」で示された「サキ」の例は、物体もしくは空間の形状上、視覚的に明らかな形で「サキ」が認識出来るものであった。碓井はこれらは「サキ」の事例の中では具体的なプロトタイプ事例であるとする。

一方、「サキ」は視覚的に「細く長い」ものでない場合でも用いることが可能であり、この場合に要因となるのが「メンタルパスの方向性」である。具体例としては、以下のようなものがあげられている。

- (6) a. サキの車
- b. 京都のサキ
- c. 行くサキザキ

(碓井 2001: 59)

こうした事例を、さらに3つに分類すると、以下のようになる。

(7) メンタルパスの方向性を持つ「サキ」の3分類

- (イ) メンタルパスの方向性によって決まる「サキ」の指し示すものが物体の場合
- (ロ) メンタルパスの方向性によって決まる「サキ」の指し示すものが空間の場合
- (ハ) メンタルパスの方向性によって決まる「サキ」が繰り返されることで時間性が高まるもの

(碓井 2001: 59)

(イ) は具体的には「サキの車」や「三軒サキの家」などの、認知主体がターゲットに投げかけるメンタルパスの方向性が物体に向かっている場合であり、これらは動く場合も動かない場合もある。(ロ) は「京都のサキ」のようにターゲットが漠然とした空間を指す場合で、この場合のターゲットは言語として明示化されていない。(ハ) の「行くサキザキ」のような場合は分類がやや不明確で、「サキのサキに行く」「サキのサキを読む」など、繰り返し用いることで時間表現の解釈も得られるとしている。

2.2.3. モノの移動性

最後の要因である「モノの移動性」に関わる例としては、以下のものがあげられている。

- (8) サキの車両

(碓井 2001: 59)

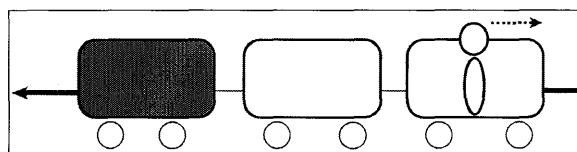


図3 サキの車両 (碓井 2001: 62)

(8) のように「サキ」を含むもの自体に動きがある場合には、認知主体のメンタルパスの方向を問わず、そのもの自体の移動方向の先端を指すのにも用いることが出来る。

2.3. イメージ拡張からの「空間を表すサキ」

篠原 (2008) においては、『「サキ」の空間用法は時間用法の前提となる』と前文をおいた上で、「サキ」の空間用法に触れている。その中では、辞書の意味記述を参考として、「サキ」の第一義に「ものの先端や末端、つきでてとがっている部分。はし」を認める。

- (9) a. 釘のサキが曲がった。
b. 紐のサキを結ぶ。

(篠原 2008: 190)

これに対し、指示範囲が拡張し、物体の先端部分の周辺の空間を指す用法を 2 つ目の分類とし、これは先に挙げた国広の 2 分類に同じである。

- (10) a. 鼻のサキをハエが飛び回っている。
b. 矢印のサキに目的地が書いてある。

(篠原 2008: 190)

そして、これらに加えてさらにもう 1 つの例として、以下のような場合を分類している。

- (11) a. 飛んでいくボールのサキには、フェンスがある。
b. 郵便局のサキに、太郎がいる。

(篠原 2008: 191)

こうした例の場合には物の形状には「サキ」が存在しないが、物体の移動を概念化する際に想起される「経路」の心的イメージが細長く先端があるように感じられるため「細長い先端」をもつものとして概念化されたとしている。(11b) の場合、郵便局は移動しないために「参照物の移動」という解釈は成り立たず、その他に存在する移動、すなわち「太郎の位置を認知している主体が郵便局の方向に向かって移動するという想定」のもとに解釈が成り立つ。

このように、表現上の参照物がどのような形状であっても、また静止していても構わない「サキ」の分類があり、その移動に伴って想起される「経路」のイメージが「細長いもの」であるために「サキ」の意味は保持され、拡張が可能であるとする。こうした「サキ」の用法は、「マエ」と比較することでより明確になる。

- (12) a. 郵便局のマエに、太郎がいる。
b. 郵便局のサキに、太郎がいる。

(篠原 2008: 192)

(12a) の「郵便局のマエ」の場合には、太郎は郵便局と発話者の間に位置するが、「郵便局の

サキ」の場合に、発話者が郵便局を「経路」として見た場合の向こう側に位置することが分かるだろう。

2.4. 「空間を表すサキ」のまとめ

以上のような先行研究を総括すると、「空間を表すサキ」には、大きく分けて以下のような別個に扱われるべき種類が存在している。

(13) 「空間のサキ」のタイプのまとめ

- ① 物の形状や何らかの性質における、内在的なサキ
- ② ①で表示しうる「サキ」と隣接、関係する外在的なサキ

①の「内在的なサキ」で最も根元的であると見られるのが、(3c) の「きゅうりのサキ」や (9) の「釘のサキ」「紐のサキ」などの、物体の形状に依存したサキである。これと関連して、モノの移動性に依っているとされる (8) の「車両のサキ」や、メンタルパス、総体としての方向性などが動機として考えられる「行列のサキ」がある。これらの概念を全てまとめたものが、図1で示された国広 (1997) における現象素であるとも考えられる。

他方、②の「外在的なサキ」は、①で示されたような特定の事物の「サキ」を前提条件としながら、これに何らかの形で関連性を持つ対象に与えられる「サキ」である。具体的には、形状から「サキ」が与えられる「矢印のサキ」の場合、実際に矢印の内部に含まれる部分を指す場合もあるが、矢印全体を見た時に、その内的「サキ」のある方向に延長された空間にも適用され、(1a) の「このサキ行き止まり」などの例に対応する。また、①で与えられる内的「サキ」にはメンタルパスなどの様々な動機が存在するため、例えば「物体の移動の経路」という対象に内的「サキ」が見いだせるならば、その方向性を動機として (11a) の「飛んでいくボールのサキ」には、フェンスがある」が現存する移動の経路の外部に与えられるであろうし (図 4)、メンタルパスをもっとマクロな視点で取ることによって、(6c) の「行くサキザキ」のような用法も可能となる。こうした2種類のサキの関係性は、明らかに①の「内的サキ」の存在があり、そこから関連性を持つという理由、つまりはメトニミー的な動機付けから、「外的サキ」に拡張されたとまとめることが出来るだろう。

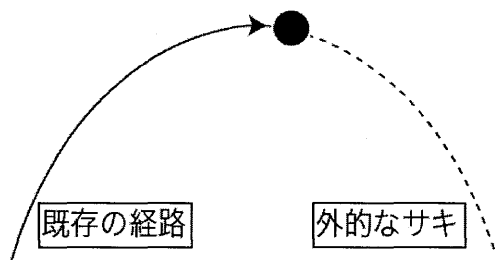


図4 外的サキの産出

3. 「時間を表すサキ」の分析

続いて、「サキ」が時間を表す場合について、各々の先行研究がどのように分析しているのか

を観察していく。すべての先行研究において、まず空間の「サキ」に言及し、その拡張事例として時間の「サキ」を取り扱っている点は共通している。

3.1. 現象素を用いた「時間を表すサキ」

国広(1997)では、現象素を用いて「空間を表すサキ」の語義を設定したが、この現象素が時間空間比喩によって拡張されたものが、「時間を表すサキ」であるとする。

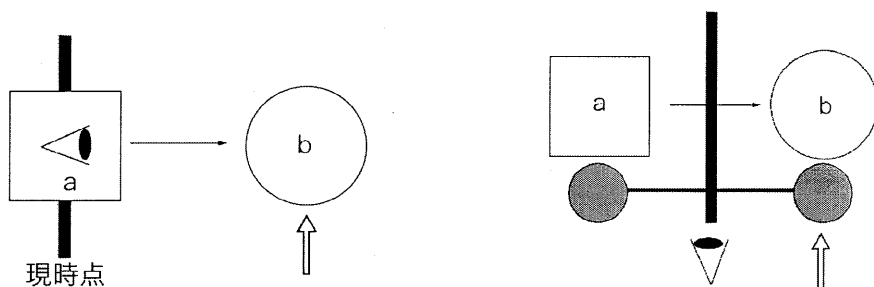


図5 時間についての現象素(国広 1997: 252) 図6 視点が異なる時間の現象素(国広 1997: 252)

図5中の点aには認知主体の視点が加わり、移動体を表す矢印は「時の流れ」になる。それはいわば「時の矢」であるとされ、過去から未来に向かって流れている。その矢の末端に視点が乗り、時の矢の先端には「未来時」がある。この図で示されるのは、以下のような例である。

- (14) a. 三年サキが楽しみだ。
b. サキが思いやられる。

これに、さらに別の視点を導入した図6のような例も派生する。これはある時点に視点を固定した「客観的視点」と名付けられた場合で、aとbは2つの出来事を表している。この出来事は「b→a」の順序で客観的視点の前を通り過ぎていく。時間は左から右に向かって矢印の方向に流れているため、bの方が「サキ」に通過する。そのことを白抜き矢印(φ)が指しており、ここから「サキ」は「順序」の意味を生み出す。このような例には以下のようなものがある。

- (15) a. 代金をサキに払った。
b. サキに着いたら注文しておいて。
c. サキに申したとおりに

図6のように視点を置くことで、「サキ」の現象素は、2つの出来事の相対的な順序関係を表すことになる。このように、国広は1つの現象素の中に視点を導入することによって、同じ図式を用いながら、2つの正反対に見える「サキ」の用法をまとめている。

3.2. 認知言語学の枠組みによる「時間を表すサキ」

碓井(2001)は、「多義語の場合、あるひとつの表現が拡張を繰り返し、元来語の持つ意味が

要であるから、その発話時 (Conceptualizer) は「過去」であっても「未来」であっても構わない。これにより、以下のような「サキ」の例が現れる。

- (16) a. サキに出かける
b. 代金をサキに払う
c. サキの大臣

(碓井 2001: 81)

ただし、すべての「順序のサキ」が発話時に関与しないわけではなく、以下のような場合もある。

- (17) a. サキ程
b. 先日
c. サキの世界大戦

この場合は、参照点となる時点が現在に特定されるため、図としては以下のように表されるようになる。

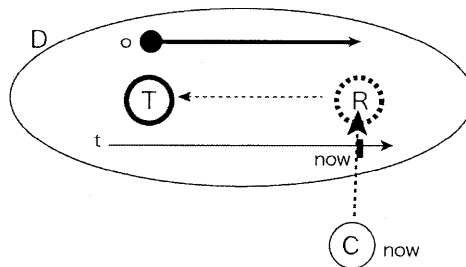


図8 参照点現在の「サキ」(碓井 2001: 82)

また、未来の参照点を取ることで、さらに未来のイベントを指し示す場合もある。以下のような例である。

- (18) 修論諮問は修論提出のまだそのサキだよ

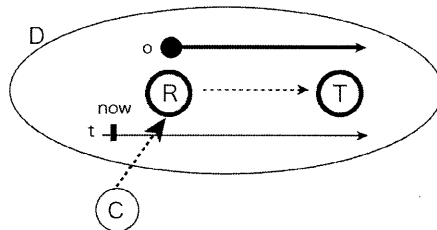


図9 参照点未来の「サキ」(碓井 2001: 85)

この「参照点未来のサキ」については、空間における「京都のサキ」などのイメージに非常

に類似しており、空間性の高い例であるとしている。

このように、「順序のサキ」を、参照点を過去、未来、現在のどこにでもおけるものと、現在を必ず参照点にするもの、未来を取るものの3種類に区別し、それぞれ、空間表現と時間表現がどのように関連し合っているかを以下の図にまとめている。空間のドメインから時間のドメインに派生する際に、「サキ」の場合は「順序」という概念を仲介役に行っていると考えるのである。

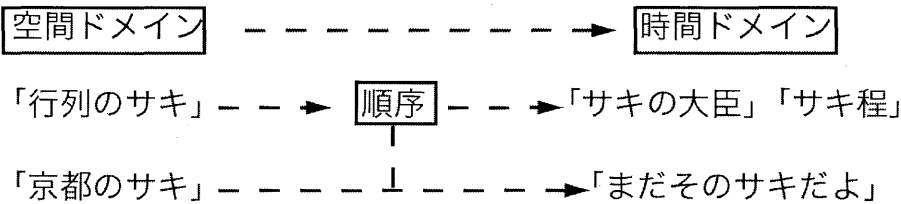


図 10 「順序のサキ」のドメイン間対応 (碓井 2001: 83)

3.2.2. 「未来のサキ」

碓井の区別するもう1つの「サキ」の時間用法に、「未来のサキ」がある。これは以下のような例で、「順序のサキ」同様に参照点図式を用いてまとめられている。

- (19) a. サキが思いやられる
- b. おサキ真っ暗

(碓井 2001: 84)

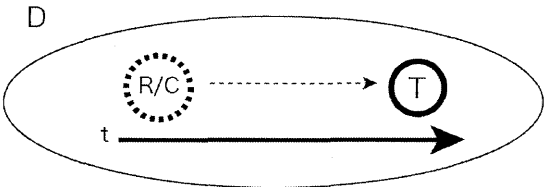


図 11 未来の「サキ」 (碓井 2001: 84)

この「未来のサキ」の特徴は「自己参照点構造」を持つことにあり、認知主体自身の発話時現在が参照点となる。また、時間表現「マエ」と対象関係を成すことから、空間性の高い「順序のサキ」よりも時間性の高い表現であるとしている。

3.3. 直示性を焦点とした「時間を表すサキ」

時間に関するメタファーの分類は、Lakoff & Johnson (1980) で取りあげられた2分類、すなわち大きくまとめて「主体移動型」と「時間移動型」の2種類が有名である。上記の3.2節における参照点図式による分析も、こうした「認知主体が動くのか、時間そのものが動くのか」という2つの視点を導入している。そして、篠原 (2008) では、Moore の議論をベースにして、この「何を動くとするか」の点に注目して分析を行っている。

3.3.1. Moore によるメタファーの3分類

Lakoff & Johnson (1980) のメタファーの2分類を踏まえた上で、Moore (2001) においては「時間移動型」には2種類の異なるメタファーが含まれると指摘し、これを“Ego-centered Moving Time”（篠原の言葉では「自己中心的時間移動型」）と、“FRONT / BACK Moving Time”（篠原の言葉では「前後時間移動型」）の2種類に分けた。具体的には以下のような例が示されている。

- (20) a. I hope we get a chance to meet in the weeks ahead.
- b. I hope we get a chance to meet in the coming weeks.
- c. The day of the Dead follows Halloween.

(Moore 2001: 153-156)

(20a) は「主体移動型」の例、(20b, c) がそれぞれ「自己中心的時間移動型」と「前後時間移動型」の例である。新たに分類された「前後時間移動型」の説明は以下の通りである。

主体は時間の列の外にあり、言い換えれば「オフ・ステージ」の状態にある。時間と主体の関係は言語化されず、また時間の動きは主体に向かって接近するものでも遠ざかるものでもない。時間の移動方向は「より早い方」が前方、すなわち時間の移動方向に動けば動く程ほどより早い時間となる。どの時点がどの時点より早い（前）か遅い（後ろ）かは、時間を観察している主体の視点による影響を受けない。

(篠原 2008: 186)

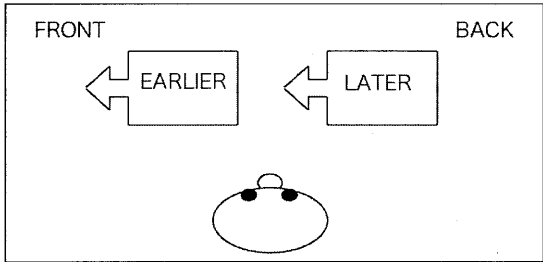


図12 「前後時間移動型」の空間設定（篠原 2008: 186）

そしてこの「自己中心的時間移動型」と「前後時間移動型」には直示性において大きな違いがあり、「自己中心的時間移動型」は直示性を持ち、「前後時間移動型」は直示性を持たないとする。これらをまとめたのが以下の図である。

TIME PASSING IS MOTION	時間参照型（非直示的）	前後時間移動型
	主体参照型（直示的）	主体移動型
		自己中心的時間移動型

図13 TIME PASSING IS MOTION の下位分類（篠原 2008: 187）

ここでキーとなる直示性は空間的「前後」と時間の「早遅」の対応関係に大きく関わっており、篠原は Moore の議論をまとめ、以下のように提示している。

(21) Moore による直示性と前後／早遅の関係性のまとめ

- (i) 空間的「前後」を意味する表現が「より早い／より遅い」という時間概念を意味し、かつ直示性が表示されていない場合、「より早い＝前」(EARLIER IS FRONT)、「より遅い＝後ろ」(LATER IS BACK) という概念対応が成り立つ。
- (i') 未来が主体の前方に、過去が主体の後方にあると捉えられている言語においては、「より遅い＝前」(LATER IS FRONT)、「より早い＝後ろ」(EARLIER IS BACK) という対応を持つ表現は ((ii)の場合を除き) 直示性の表示を伴う。
- (ii) 「時間配列語」(言語文化共同体の成員に共有された時間語彙の一種。例えば「朝、昼、夜」や曜日、正月やクリスマスなど) が前後関係の参照点となっている表現では、直示性の表示がなくても LATER IS FRONT の解釈を持つことがある。
- (iii) (ii)に当てはまる例は、主体移動型の時間メタファーに属する。

(篠原 2008:188)

具体的には、(i) の例としては「太郎は花子より前 [先] に帰った」などがあり、ここに直示性の表示は無く、この表現をいつどこで発話しても、「太郎が帰った時間」が「花子が帰った時間」より早い。

(i') の例としては「試験日は目の前だ」や「これから先」などがあげられている。この場合、未来の時間が「目の前」「これから」などの直示表現によって前方に固定されている。そしてこうした直示性がなくとも、「クリスマスの先に正月が待っている」などの用法は、(ii) で提示された「時間配列語」が参照点となるために LATER IS FRONT の解釈が可能になる。

3.3.2. 日本語の「サキ」の早遅と直示性

Moore の (21) のような分類を踏まえた上で、篠原 (2008) では日本語の「サキ」における一見独特に見える振る舞いを検討している。まず、(21i) と (21ii) に当てはまる例が日本語において一般的なものであることは間違いない。

- (22) a. 窓拭きよりサキに、風呂掃除をした。 (21i)
- b. お盆からサキに休みを取った。 (21ii)

(篠原 2008:202)

その上で、「サキ」に関しては「直示性の表示を持たずに LATER IS FRONT の解釈を持つ例」が存在している。

- (23) a. 東京に引っ越してからサキ、ずっと墓参りをしていない。
- b. 家族旅行は、叔母の手術よりサキのことになるだろう。

(篠原 2008:197)

これらの例は、一見すると Moore の説の反例のようにもとれるが、篠原はこれを反例とはせず、むしろ Moore の主張する直示性との関連性を補強しているとする。例えば、以下のように全く同じ構成にした時にも、「時間配列語」を参照点とした場合と、そうでない場合には明らかな差が生じる。

- (24) a. お盆からサキは、休みを取った。
b. *窓拭きからサキは、風呂掃除をした。

こうした例は、時間配列語と LATER IS FRONT の解釈が概念対応として非常に安定していることを示している。

こうした現象が何に起因するのか、という問題に対し、篠原が提案するのは移動するのは何かという問題である。「時間が移動する」と捉えた時には、EARLIER IS FRONT という設定が経験的動機付けを強く持っているため、逆の LATER IS FRONT の説明は困難となる。

一方、LATER IS FRONT という設定が経験的動機付けを持つのは、時間ではなく主体が自ら前方に進んでいく場合であり、「サキ」の LATER 用法 (23b) は時間移動型なのではなく、主体移動型なのだと考えれば良い。

これは「サキ」が時間配列語を用いた場合に安定する、という事実とも整合性を持つ。時間配列語を用いることで時間的事象の順序列が想起されやすく、それを見渡すという視点を取りやすいと想定される。つまり、一見直示性の表示を含まず、Moore の論に反するように見える「サキ」の場合でも、直示性を持たないにも関わらず直示的フレームの時間メタファーとして解釈される事例であると見ることが出来るわけである。

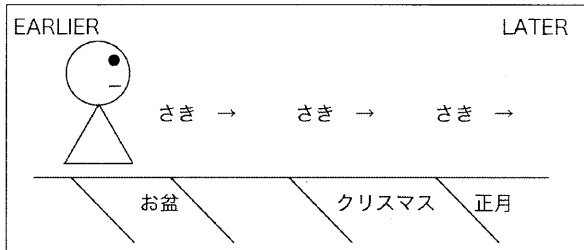


図14 時間配列語と「見渡し」の視点 (篠原 2008: 205)

3.4. 「時間を表すサキ」のまとめ

以上のような先行研究を総括すると、大まかに分けて、「時間を表すサキ」とされるものには、以下のような場合分けが可能である。

(25) 「時間のサキ」のタイプのまとめ

- ① 時間を外在する対象として把握し、その仮想的実体に、空間で与えられた「内在的サキ」を導入する「時間参照型」サキ。
- ② 時間を、時間領域を移動する認知主体を取り巻く環境であると把握し、その仮想的環境に、主体の持つ方向性を動機とした「外在的サキ」を導入する「主体

参照型」サキ。

①は、3.1 節でいうところの 2 つ目の現象素 (図 6) であり、参照点図式を用いた場合には図の 7 から 9 まですでに表された「順序のサキ」と名付けられた考え方、そして直示性による分類の場合は、「時間参照型」の用法ということになる。この場合、指し示す時間自体は過去時から未来時まで幅広く取ることが可能である。そこには 1 つの実体として仮定された「時間」の何らかの順序が存在することになり、これはすなわち「内部状態に差のある実体」としての時間の捉え方である。この時、観察者は観察対象たる実体を持つ時間とは離れた位置に置かれたニュートラルな存在として位置づけられており、図 6 の現象素ではこれが「視点の遊離」として、参照点構造の場合は「ドメインからの離脱」として、そして直示性の表示の時にはより分かりやすい観察者としての喩えで表示されている (図 12)。

他方、②で与えられた「サキ」は、観察者が内在することによって、時間そのものを 1 つの環境として見ている状態である。この時、時間という実体の中に不均衡を (つまりは「サキ」を) もたらすのは観察者自身の「視点」であるとまとめられており、「サキ」を動機付ける観察者自身の外側に、その方向性と関わりを持った「外在的サキ」が定義される。この時、観察者が向かう方向性はおしなべて「未来」を向いている。これを表示した現象素が図 5 であり、参照点構造を用いた分析では「未来のサキ」と冠して独自の立場を獲得している。また、直示性表示の例では、「見渡し」という言葉を付加させつつも、最終的にはやはり「視点」という共通のタームを用いた理解が求められるようになっている。

これらの「時間のサキ」のまとめで共通しているのは、「どの分析も、その分析手段として『空間のサキ』を前提としている」という部分である。

(13) 「空間のサキ」のタイプのまとめ

- ① 物の形状や何らかの性質における、内在的なサキ
- ② ①で表示しうる「サキ」と隣接、関係する外在的なサキ (再掲)

(25) では (13) でまとめた「空間のサキ」と対比する形で提示されているが、各々 (13) ①で与えられた「空間の内在的サキ」が (25) ①の「時間の時間参照型サキ」を動機付け、さらに (13) ②で与えられた「空間の外在的サキ」が (25) ②の「時間の主体参照型サキ」を動機付けている。

さらに、「空間のサキ」で述べたように、(13) ②の「外在的サキ」は、その存在の前提として①であげた「内在的サキ」がある。これをまとめると、時間、空間を含む全ての「サキ」のタイプは、(13) ①で代表される「物の形状や何らかの性質における、内在的なサキ」に動機付けられた存在であるということになる。こうした (13) ①の「内在的サキ」とその他の事例の関係性については、『「内在的サキ」がプロトタイプの」である』や、『「内在的サキ」が第一義である』といった表現が考えられる。

4. 「サキ」のプロトタイプを巡る問題点

上記のように、「はじめに『内在的サキ』ありき」としてそこから派生的な「サキ」の事例を探る方策において、この「内在的サキ」を「プロトタイプのサキ」と便宜上呼ぶことにする。

この節で最大の問題となるのは、この「プロトタイプのサキ」の存在の真偽である。別な言

葉で置換するならば、『サキ』は、空間要素を基盤としたプロトタイプから派生したと言えるのかどうかである。現時点において、このプロトタイプのサキの存在を第一に前提とするだけの論拠は充分ではない。

4.1. 「プロトタイプのサキ」を定義付ける要素

まず、最も根元的な問題となるのは、「プロトタイプのサキ」を動機付けるためにその実体に含まれるべき要素とは何なのか、ということである。このことには前述の通り碓井(2001)がある程度詳しく言及しており、(2)では4つの可能性を列挙していた。こうした要素を精査することによって、「内在的サキ」は定義されるものなのだろうか。その妥当性について、改めて確認する。

まずは①の「長く細いもののスキーマ」である。以下の例があった。

- (3) a. *じゃがいものサキ
b. ?なすびのサキ
c. きゅうりのサキ (再掲)

また、「竿のサキ」や「紐のサキ」など、形状から両端どちらも「サキ」になる物が存在することを指摘し、こうしたものの「サキ」の決定には「長く細いもののスキーマ」が影響するとしている。そして「槍のサキ」「ペンのサキ」などに加えて「鼻サキ」などは「細く長い」必要もないため、「細く長い」形状以外にも③にあげられた「尖っている等」の形状も決定の要因になるとした。

しかし、これらの要素については、先に提示された「現象素(図1)」に図示された「方向性」という言葉が充分な説明力を持つと考える。国広(1997)では「元」と「先」という両端の存在と、その片方を捉える時の特定の方向性が「サキ」に必要であると考えており、この「方向性」を与える1つの状態として、「細く長い」という形状が存在しているのではないか。例えば以下の対比がある。

- (26) a. 棒の {サキ/端}
b. 棒の {*両サキ/両端}

碓井の分析の通りに「細く長い」形状がサキを決定付けるとするならば、(26a)のようにほぼ同じ部位を指す「端(ハシ)」も同じように使われるところだが、同時に両側を示すために「両」をつけた時、「両端」は正しいが「両サキ」とは(ほとんど)言わない。つまり、「サキ」は「細く長い」ことが第一にあるのではなく、そのことによって生まれる何らかの「方向性」によって定まるものである。「細く長い」ことは、それを認識する際に形状に沿って動く視線に関わることも考えられる。「尖る」という形状は、その1点における「収束」を意味し、これはヒトがその対象を知覚する際には非常に顕在的な状態となりうる。他方、逆に「広がる」場合には、注意を向ける点は1点に定まらず、その分だけ顕在性は劣る。つまり、「尖る」ことそれ自体が、ある種の注意の方向性を生み出す役割を果たしていると考えられる。

次に(2)の②と④であるが、「メンタルパス」は「心的走査」などの訳語からも分かる通り、移

動を含む概念であり、これは④の「モノの移動性」と説明力が重なる。例えば、碓井は「行列のサキ」の場合に「全体が一方向に進んでいなくても使用可能であり、必ずしも移動性が必要とは言えない」と指摘しており、このような例で重要なのは「メンタルパスの方向性」であるとするが、この場合のメンタルパスは、根源的には視線の移動、少なくとも「サキ」を決定付ける1つの動きを伴うことは間違いない。

つまり、碓井があげた4つの要因は、「方向性」という1つの要素に①と③がまとめられ、「移動性」という要素に②と④は含まれるのである。そして、「移動」というものは、当然のことながらそこに一定の「方向性」を含むものであり、「方向性」があるということは、何らかの「移動」を伴う必要がある。これらはやはり、表裏一体の関係にある。

1つ1つの事例を見ていく中において、「サキ」を動機付けるものはその形状であったり、移動であったりする場合がある。しかし、そこに根元的に与えられた「サキ」を「サキ」たらしめる要素は全ての事例の共通部分に与えられた1つの「方向性」として考えることが出来る。そして、ここに必ず何らかの「移動」が立ち現れるとするならば、そこには、「動くこと (MOTION)」に必要とされた時間要素が随伴するのである。

4.2. 分類が困難な「サキ」の事例

上記の碓井 (2001) の分類において、その動機付けが困難であるとされる事例についてもここでとりあげる。それは、以下のようなサキの用法である。

- (27) a. 軒サキ
- b. 庭サキ (aは(碓井 2001: 62) より)

(27a) について、碓井は「古来日本の住宅形態は縦長であったこと」などを一応の検討材料としているが、関係性は薄いと言わざるを得ない。たとえ家がどのような形状であろうと、「軒サキ」で表される部分というのは、その家屋の機能的に様に決めることが可能であるからである。この場合の「サキ」は、あくまで「家」や「軒」「庭」といった事物の用法、機能、慣習を想定した時に、「家屋」から「軒」や「庭」への何らかの「方向性」が「サキ」を動機付けると考えるべきだろう。「庭先」と「庭」の違いは、「庭先」の方が屋内から「出る」場所であるという意味の差が見受けられる。「庭先に出る」なら問題ないが、「庭先に入る」は不自然である。家→庭という方向性が、この時に「サキ」を動機付けるのではないか。国語辞典によれば「庭先：庭の縁側に近い地点」とあり、家屋との近接性が伺える。他にも「店サキ」も同様であるし、(6) であげられた「行くサキザキ」などもこれと似たような振る舞いをする。「旅行サキ」と言った時にも、例えば「12 カ国を回ってくる世界一周旅行」を想定した時、その経路は非常に長く、一定の方向性を想定しにくいものとなるが、この時に回った全ての国を「旅行サキ」と言い表すことが出来る。このことは「経路」などの「細長い線性」を「サキ」の動機として仮定すると不自然になってしまうだろう。

また、「紐のサキ」などの例の場合、その両端が「細くて長い物の形状」によって「サキ」と見なされるはずであるが、その状態によって、両端が「サキ」とは言いにくい状態も存在する。

図 15 のように渦を描くような形で紐が置かれていた時、外側の端については「サキ」と呼びやすいが、中心にあるもう片方については、多少なりとも「サキ」と呼びづらい状態にある。ほ

かにも、「行列のサキ」という場合にも、列全体の形状が「細く長い」としても、全体的な集合としての形状がそうは見なされずに、形状のみから「内在的サキ」を動機付けにくい場合などもあり、これらの把握の仕方についても、一概に空間的要素から判断することは出来ない。

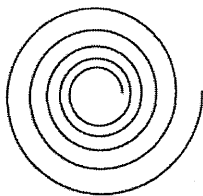


図15 紐のサキ?

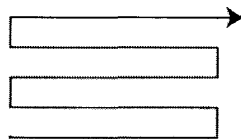


図16 一方に決まらない行列

4.3. 時間の実体化の問題

そして最後にあげられるのは、時間を空間メタファーとして捉えた時に立ち現れる外在性の問題である。「はじめに内的サキありき」で考えた時に、それを何らかの形で想定した「時間」という対象に適用するという方策は、果たして実際に起こりうることなのだろうか。

また、時間領域での「サキ」の振る舞いの種類について、多くの研究で「視点」を導入しているが、この「視点」というものが一体何であるか、という言及がなされていない。これは、分析の初期段階で「時間語彙は空間語彙のメタファーからなる」という前提を持って論を進めているため、それだけで説明力を持つと見なしているためであると考えられる。すなわち、「空間ドメインにおいて存在する『視点』(さらに突き詰めれば「視覚」)という概念を、時間ドメインに拡張して適用した」ということで説明として充分であると考えられるわけである。

しかし、空間メタファーに依る時間語彙の分析には、「時間とは何であるか」という問いに対する解答が含まれておらず、それ故に「空間ドメインにおける『視点』」という要素が、時間ドメインにどのような形で写像されるのかが説明出来ない。

そして、例えば3.2.1節の「順序のサキ」の説明では「空間性の高い表現である」とあり、3.2.2節の「未来のサキ」の説明では「時間性の高い表現である」とあるが、この時の「空間性」「時間性」とは何であるか、という説明がない。同じ空間メタファーを説明の方策として用いているならば、この時の「空間性の強さ」「時間性の強さ」は写像のどのような部分で現れるものなのか、説明の道具立てとの関係性が求められるのではないか。

5. メタファーを用いない「サキ」の分類

以上のような問題を踏まえた上で、「サキ」の事例分析を行っていく。

5.1. 「サキ」の時空間に共通する意味

まず、根本となる「サキ」の意味がどのようなものであるか、ということについて言及する必要があるが、これは様々な知識や具体的経験の総体として存する1つの概念であり、厳密に明文化することが困難な対象である。そこで、これまでのいくつかの分類考察から、これを帰納的に導き出すを試みる。

ここで重要となるのが、前節で取りあげた「プロトタイプのサキ」の存在である。先んじて

「このプロトタイプのサキの存在を第一に前提とするだけの論拠は充分ではない」と述べたが、これは「プロトタイプのサキ」を前提として演繹的にサキの分類を定める方法論への疑問であり、数々の事例から、帰納的にこれを求められるとするならば、その意味は逆転する。

「プロトタイプのサキ」に与えられた条件は、「方向性」ないし「移動性」であることが前節で確認された。具体的には「方向性」とは「モノの形状」と「長くて細いもののスキーマ」の2つの必要条件から導き出され、「移動性」は「メンタルパスの方向性」と「モノの移動性」という2つの必要条件から導き出された。すなわち、この「移動性」ないし「方向性」という要素こそが、「サキ」を現出させるに至る最低限の必要条件ということになる。

ここで重要なのは、この「方向性」ないし「移動性」という概念は、空間的な要素だけでは説明し得ないという部分である。「方向性」という要素は何らかの移動を含意すると考えるためにここでは「移動性」だけに話を限定するが、「移動」という概念には、必ずその内部に含まれる「状態」と「時間」が存在していなければならない。単に異なった2種類の「状態」のみが与えられると仮定しても、我々はそこに「移動」を知覚することは出来ないのである。当然のことではあるが、逆に異なった2つの時間だけを与えられたとしても、そこに「移動」を知覚出来ない。

こうした時間と状態の2つの要素が分化不可能である状態がプロトタイプの意味であり、「サキ」のプロトタイプの意味を定義するとすれば、この「移動」の特定の1要素を指し示す語、ということになる。敢えてこれを図示するとすれば、以下のようになるだろう。

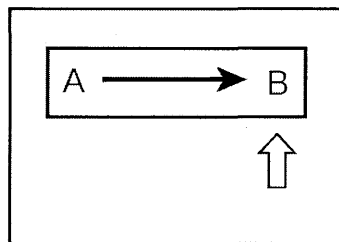


図17 サキの両義的原義 (=図1)

図17は、先に与えられた「空間のサキの現象素」の図と同じものを採用している。図中で表される黒い矢印(→)は対象に含まれる何らかの「移動性」を示し、図中AとBという2点は、何らかの差異を持つ2つの要素と、その間に状態的、もしくは時間的な開きがあることを示す。この時の「開き」という言葉も非常に曖昧ではあるが、空間要素として捉えるならばそれは「距離」であろうし、時間要素で捉えるならばそれは「時差」になるだろう。これをまとめるならば、それすなわち「移動を擁する何らかの差異」としての要素間の「開き」である。そして図中の白い矢印(↑)で示された部分が、「サキ」で同定される要素ということになる。

国広(1997)における現象素の説明の場合、これは視覚的に明らかな図に表されたことから分かる通りに「空間内におけるサキ」を意図して描かれたものであった。しかし、ここであげたプロトタイプの意味の場合、便宜的に図示されているに過ぎず、図で示された概念についてはあらゆる概念を取りうる部分に注意が必要である。

そして、こうして与えられた意味が具体事例にまで適用される場合に、そこに含まれる状態

要素、時間要素のいずれかの要素が焦点化し、1つ1つの用法として現れる。

5.2. 「サキ」の空間への適用

「サキ」の意味が空間に適用されるとは、すなわち「サキ」で与えられた空間(状態)要素が焦点化されることを意味する。その際には、そこに含まれた「時間要素」は必然的に捨象され、その度合いを大きく下げる。

5.2.1. 空間における「内在的サキ」

空間要素における「サキ」の用法の1つに、先んじて「プロトタイプのサキ」として「内在的サキ」がある。これは事物の内部の状態に何らかの不均衡(事物の内部における状態の差)を知覚した場合に生じるもので、そこには心的に起こる視線の移動を含めた移動の知覚現象が深く関わると考えられる。例えば「ペンのサキ」「槍のサキ」に代表される「尖っている」などの形状の特徴は、収束するという特性上、そこに特定の方向を持った意識の流れが生まれる。

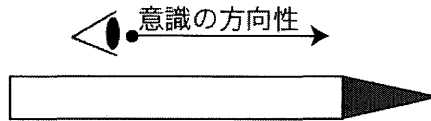


図18 形状による意識の流れと「内在的サキ」

(3) であげられた「じゃがいものサキ」「なすびのサキ」「きゅうりのサキ」の容認度の違いについては、そこに生じるメンタルパスの働きで説明が可能である。「細くて長い物のスキーマ」で確認した通り、「細いこと」「長いこと」はその先端への視線の流れ、すなわち意識の流れを生み出す。「じゃがいも」のように全体が均質である場合には、意識が収束する点が存在しないため、すなわち「サキ」を同定することが困難となる。

そして(26)で提示した「棒の両サキ」ということが困難であるという問題についても、人間の「見る」、ひいては「知覚する」という行為の性質を考えた時、棒は「細く長い」ために意識の流れを生み出すが、その方向は基本的に1つに限られる。たとえどちらの端も同じ形状であったとしても、「サキ」として知覚するには、そこにどちらか一方に限定された意識の流れを必要とし、同時に2つの「端」を「サキ」とすることが困難になるのである。

「サキ」はモノの形状という具体的な性質だけには留まらずに「方向性」を有したものに存在する。分かりやすいのは「サキの車両」のように実際の移動を伴う対象であるが、他にも(27)であげた「庭サキ」「軒サキ」などの用例についても、やはり家屋から戸外へのある特定の「意識の流れ」によってもたらされた例と考えることが出来るだろう。全国各地を旅行して回る場合の「旅サキ」についても、「地元」→「目的地」という1つの大きな流れを考えるならば、旅行で向かった全ての目的地は、その方向の1つの要素として表された「サキ」であると考えることが出来る。

図15であげたような紐の形状による「サキ」の容認度の差についても、全体的な形状を知覚した際に、そこに何らかの「意識の流れ」による「方向性」が生まれるか否かによって差が生じるであろうし、図16にあるような空間的方向性の定まらない「行列のサキ」も、「行列」という

要素自体の持つ意味を考えた時、ヒトはその並び自体に「方向性」を認めることが可能である。

5.2.2. 空間における「外在的サキ」

次に、「内在的サキ」とは異なり、「方向性」を定める対象物の外部に「サキ」を同定する用法が、「外在的サキ」である。この場合には、対象内部において存在していた「方向性」がそのままの方向（移動）を維持して対象外部にまで拡張される。

「矢印のサキ」といった場合に、その矢印の内部に「内在的サキ」が存在するが、この「内在的サキ」を前提とし、その「内在的サキ」と同じ方向性を持つ外部の要素を、「サキ」で表すのが「外在的サキ」である。

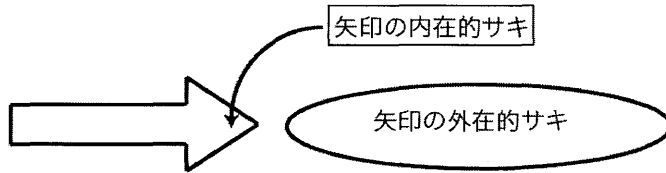


図19 矢印の2つの「サキ」

「外在的サキ」を動機付けるものは「内在的サキ」であり、これに関係する（多くの場合は空間的に接点を持つ）要素が、「サキ」として同定される。

例えば「鼻のサキ」といった場合に、鼻自体の部分さをさすこともあるし、(10a)のように「鼻のサキをハエが飛び回っている」といった場合、これは鼻の外在的サキである。

そして、「外在的サキ」が頻繁に用いられる場面に、図4であげた「心的経路による外在的サキ」がある。様々なものの「移動」の経路を空間的に1つの「方向性」と認め、その延長に「外在的サキ」を同定する。(11b)の「郵便局のサキに太郎がいる」の場合、認知主体と郵便局という2点を結んだ心的な移動経路を想定し、さらにその延長上にある「外在的サキ」が生まれる。同様にして「サキの車」や「京都のサキ」といった用例も説明が可能である。ちなみに、この心的経路を伴うサキの場合は外在的なサキが多いが、内在的サキの用例も確認出来る。

(28) 行き着いたサキは京都だった。

このようにして「内在的サキ」から「外在的サキ」が産出される過程には、対象と、それに隣接した要素を関連づけて知覚するヒトのメトニミックな認知的特性が関わっていると考えられる。そして、そもそも「サキ」のプロトタイプの意味に「方向性」を伴い、その方向性は1つに限られるのであるから、対象の内部から外部への延長という過程も、ごく自然に生み出されるものであると考えることが出来るだろう。

5.3. 「サキ」の時間への適用

続いて、空間同様に「サキ」が時間に適用される過程を考察する。この時には、「サキ」のプロトタイプの意味に含まれた時間要素に焦点化が起り、同時にそこに含まれた「空間要素」は捨象され、必然的にその度合いを下げる。

5.3.1. 時間における「内在的サキ」

時間の「サキ」の場合にも、「矢印」や「きゅうり」と同じように、対象となる時間自体に「方向性」を知覚することにより、「サキ」の同定を行う。そしてこの場合に、基本的に「サキ」となるのは過去時である。このことは、3.3.2節で触れたように、「前方にあるモノの方が後方にあるモノよりも時間的に『早く』目的地または通過地点に達するという経験的動機付け」が働いている。

ただし、「矢印」や「きゅうり」の場合、その対象に「サキ」と「元(モト)」という2点の対比構造(開き)が明示的であったが、時間という対象は、「出来事の起こり方の順序」であるから、「サキ」を同定するための「元」についても特定する必要が生まれる。そして、この「元」となる「時点」は、その用法次第で異なる。

(15) a. 代金をサキに払った。

b. サキに着いたら注文しておいて。

(再掲)

(15a) の場合には発話時点で「代金の支払い」が終了しており、「元」となるのは「発話時」である。そして(15b) の場合には「サキ」で同定された「聞き手の到着時」は未来時であるが、その「サキ」を同定するための「発話者の到着時」がそれよりもさらに未来時で「元」として機能している。このように、一続きの「出来事の順序」を1つの対象として把握し、その中の過去時方向に「サキ」を同定するのが、時間における「内在的サキ」である。

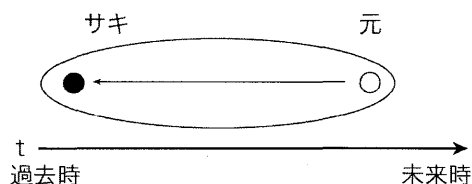


図20 時間を対象とした内在的サキ

図中の黒丸(●)がサキで同定される時点、そして白丸(○)が「サキ」を動機付けるのに必要な「元」の時点である。楕円は、「元」によって「サキ」を同定する際に現れる対象としての時間、下に引かれた矢印 t は、人間が認知主体として経験する時間そのものの方向性を示す。

5.3.2. 時間における「外在的サキ」

空間と同様に、時間における「サキ」にも対象内部に含まれない事例である「外在的サキ」が存在する。しかし、空間的な要素の場合には対象の内部と外部の差別化が容易であったが、時間の場合に、その対象として取り出す時間は、認知主体によって知覚されるもので、「矢印」や「きゅうり」の内外の区切りのような一般性を持たない。図20における楕円で示された「対象の時間区分」は、その時々によって必要な「区切り方」を変えるのである。

その上で、ヒトが厳然たる「対象」として把握出来る1つの時点というものが存在している。それを代表するのが「現在」である。「現在」は、我々が知覚出来る「時間」の唯一実存的な姿であると捉えることが可能である。そして、この「自己のおかれた時間」を対象とした時に、そ

の周辺の時間要素は「外部」として捉えることが可能となる。

ヒトは「時間は過去に向かうことはあり得ない」という経験的な知識を持つ。そのため、「自己のおかれた時間」と「それ以外の外部にある時間」との関係性における「方向性」については、未来時に「サキ」を同定する。これが、時間における「外在的サキ」である。繰り返しになるが、この「外在的サキ」の例は以下ようになる。

- (19) a. サキが思いやられる
b. おサキ真っ暗 (再掲)

(19a) の例の場合、自らのおかれた「現時点」と、そこから自らが経験していくであろう「未来時」への方向性を1つに定め、未来方向の「未だ経験していない時間」を「外在的サキ」と捉えている。

また、3.3.2 節で明かなように、このような用法は「時間配列語」との関係において観察されることが確認されている。

- (18) 修論諮問は修論提出のまだそのサキだよ。
(23) 東京に引っ越してからサキ、ずっと墓参りをしていない。 (再掲)

このような用法の場合には、時間配列語によって「元」となる時点が確定され、この時点で「サキ」を含む対象としての時間が一般性を持つためと考えられる。例えば (18) の場合には「修論提出」が、(23) の場合には「東京に引っ越した時」が時間を対象として取り出すための「元」として働き、そこに「自己の知覚する時間」を想定することが容易となる。図 20 と比較して図示するならば、以下になるだろう。

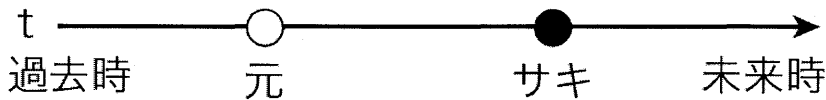


図 21 時間を外においた「外在的サキ」

図中白丸 (○) には「現在」や「修論提出」などの特定の時点を確認、その時点に自己をおいた時に、自己の認知し得ない外在する時間、すなわち未来時に向けてこれまで経験してきた時間の「方向性」を延長した部分に「外在的サキ」がある。

以上のように、「サキ」の時間的要素と空間的要素が等しくそれぞれの方向に焦点化されることによって、「サキ」は時間語彙としても空間語彙としても働くことになる。

6. まとめ

本稿では、時間語彙としての「サキ」と空間語彙としての「サキ」は、片方からの派生物という関係ではなく、事態認知のありようを根本においた概念基盤から等しく与えられた、用法の違いであることが示された。これにより、対象となるドメインの性質が起点となるドメインの性質と明確に分化されているとは言い難い空間メタファーによる説明手段を用いずに、全ての「サ

キ」の用法の関係性を明らかにすることが可能である。また、時間と空間が本質的に分化が困難であるという前提事項についても、「サキ」という非常に豊富な意味を持ち、多様な姿を取る言語事例を詳察することで、その渾然一体となった事態のありようと、それを知覚する際のヒトの認知の複雑さを確認することになった。

だが、このことは、「ヒトは時間をどのように知覚するのか」という疑問に対する答えが与えられない現状において導き出せる、最低限の仮説であり、推論でしかない。現時点で与えられた推論の方向から、より一般性の高い、科学的により有意義な理論体系としての精緻化が課題となる。

参考文献

- 深田智・中本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』東京: 研究社.
- 国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』東京: 大修館書店.
- Moore, Kevin E. 2001. *Deixis and the FRONT/BACK opposition in temporal metaphors*. In Cienki, A. Luka, B. J. & Smith, M. B. (Eds.), *Conceptual and Discourse Factors in Linguistic Structure*. 153-167. CSLI Publications, Stanford.
- 森田良行. 1980. 『基礎日本語 2』東京: 角川書店.
- 森田良行. 2002. 『日本語文法の発想』東京: ひつじ書房.
- 中村ちどり. 2001. 『日本語の時間表現』東京: くろしお出版.
- 仁田義雄. 2002. 『副詞的表現の諸相』東京: くろしお出版.
- 篠原和子. 2002. 「空間的前後と時間概念の対応」, 『日本認知言語学会論文集』2: 243-246. 日本認知言語学会.
- 篠原和子. 2008. 「時間メタファー「さき」の用法と直示的時間解釈」, 篠原和子・片岡邦好(編)『ことば・空間・身体』179-211. 東京: ひつじ書房.
- 碓井智子. 2001. 「空間認知表現と時間認知表現 -日本語マエとサキの認知言語学的考察-」, 京都大学 人間・環境学研究所 修士論文.
- 碓井智子. 2002. 「空間認知表現と時間認知表現: 日本語の「サキ」の認知言語学的考察」, 『日本認知言語学会論文集』2: 150-158. 日本認知言語学会.
- 碓井智子. 2004. 「空間から時間へ -写像の動機付けと制約-」, 『言語科学論集』10: 1-17. 京都大学.
- 渡辺実. 1995. 「所と時の指定に関わる語の幾つか一意味論的に」, 『国語学』181: 18-29. 日本語学会.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』東京: 東京大学出版会.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.